
体育祭、その行方。

syon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

体育祭、その行方。

【Nコード】

N5773S

【作者名】

syou

【あらすじ】

靴を探す陸上部員、彼女の為に走るテニス部員、賭博をする三人組。体育祭で、それぞれの思惑が交錯する――。

さて、体育祭はどうなる？

*Smile Japan参加作品

靴、その行方。

「おい」頭を掻きながらサッカー部の日比野ひひのがこっちに来る。「どういうことだよ、靴を忘れたって」

「しょうがないじゃないか。忘れちゃったんだもん」苦笑しながら僕が言う。

実を言うと、ちゃんと昨日まで靴はあった。

では、何故靴が無くなってしまったか。

僕は、家に帰るとすぐに鞆や学ランなどをリビングに散乱させてしまふという、だらしない癖がある。昨日も、いつも通りそれをしてしまった。それをしていなければ今、僕は彼に怒られていなかったはずだ。

その後すぐに風呂へ行った。その日は部活で汗を流していたため、シャワーだけでも浴びたかった。風呂から出て、リビングに行ってみると、犬小屋の扉が開いている。そして、リビングを見ると、教科書やらシャーペンやらがちらかっている。風呂に入る前とは比べ物にならないほど荒れている。ちよつと待て、僕はこんなに汚してはいないはずだ。

ふと、犬小屋にベンがいないことに気がついた。きっと、鍵が緩んでいて出てしまったのだろう。となると、何故鞆が漁られているかも納得できる。ベンが漁ったのだ。理由は、よくわからないが。僕は鞆から出た教科書やら筆箱の中のペンなどを鞆の中へ仕舞っていく。

すると、俺はあることに気がついた。

「靴は、どこだ？」

教科書やペンはちゃんとあった。だが、靴だけが無かった。

「ベン？」ベンのことを呼ぶ。すると、台所の方からフローリングと肉球の擦れる音が聞こえた。

俺は小走りで風呂場へと向かう。嫌な予感がした。

そこにはやはりベンがいた。だが、俺の予想を超えたことが起きていた。

ベンが、靴を食べていたのだ。しかも、両脚共、だ。ボロボロになった紐、もぎ取れそうな爪先の部分。

僕はこう思った。

何故、体育祭前日にこういうことが起きるんだ。

——というのが、靴が無くなった経緯だ。

さすがに、昨日の一連の話を日比野に言えるほど僕には勇氣というものが無い。

「じゃあ、誰かから借りてくれよ。今回のリレーで、陸上部のお前は要^{かなめ}なんだからさ」無茶なことを彼は平然と言った。どれだけリレーで優勝したいんだよ、お前は。

「そんな無茶言われても……」

どうしようか。日比野は、無理矢理にでも誰かから借りさせるつもりだ。そんなリレーに力を入れなくても、と心の中で溜息をつく。「陸上部のやつから借りれないのかよ」彼の眉間に皺が寄っている。「サイズのこととか、その靴に履きなれてないってことがあるから下手したら普通の運動靴とかの方が早いよ」そうだそうだ。無茶言うんじゃねえ。僕の中の聴衆が内心でそう言う。

「じゃあ、運動靴を出してくれよ」苛々としているのか、声が刺々しい。そんなに怒る事か？

「三組の近藤に貸しちゃったよ。俺、リレー以外出ないからさ」ちようど数分前のことだった。何とタイミングが悪い。

彼は腕を組んで、顔に怒りを浮かべる。お前はどこの金剛力士像だよ、と心の中で苦笑する。

「じゃあ、近藤から取り返して来いよ。急遽^{きふじゆ}必要になったから、って」

「無理だよ。もうそろそろ種目だから、近藤」

「種目って……」近藤が絶句している。

「ああ。四百メートル。必ず一位になりたいから、って言って僕に

運動靴を貸りに来たんだよ」何故一位になりたいかは教えてくれなかったが。お小遣いとかが上がるのだろうか、と色々考えてみる。「何でお前に借りたんだよ。他に使わない奴いるだろうが」クラス対抗リレーを何だと思っているんだ、と日比野が言った。いや、ただの種目ですよ、と僕は心の中で反論する。

「僕が陸上部に所属してるからだって。脚の速い奴が履いている靴だから、自分の脚も少し速くなるとか思ったんじゃない？」確か、近藤はテニス部だったはずだ。そこまで脚は遅くないはずなのに、とその靴の話を持ちかけられた時に僕は不思議に思った。

「四百メートル走に出る生徒は、各自準備を始めてください」そんな放送を入れても、きっと大半がストレッチとかをしないはずだ。というか、大半が何をすればいいかわからなくて路頭に迷っているんだろうな。ふと、そんなことを思った。

「とにかく、走れる靴を誰かに借りとけよ！」彼は校庭へ走っていく。

「何処へ行くんだよ、日比野」

「俺、四百メートル走が種目だから」

颯爽と日比野は自分の席へと帰って行った。きっと、水分補給とかなだろう。俺は胸を撫で下ろす。やっと金剛力士像から解放された。だが、このまま靴を借りないままリレーの時間になってしまつと俺がクラス対抗リレー馬鹿に怒られてしまう。ただでさえ面倒くさいのに、これ以上面倒くさくなるだなんて俺には耐えられない。

俺はしょうがなく、陸上部の部室へと向かうことにする。

さて、部室は開いているだろうか？

順位、その行方。

晴天に、派手な銃声が轟く。

僕はその音を聞いてスタートを切る。種目は四百メートルだ。

僕は、これで必ず一位を取らなきゃいけない。

何故か。

あの子を、彼女にするために。

風を体を感じながら、とりあえず六割ほどの力で走る。あまり序盤で勢い良く走りすぎると、後でスタミナ切れしてしまう。

ギャラリーの声が聞こえるが、何を言っているかわからない。ふと、彼女は僕のことを応援しているのか気になった。

——いやいや、ここで変な事を考えるんじゃない。走りに影響が出る。

トラックの半周を回った。あと、もう一周と半分だ。

うちの学校のトラックは二百メートルだ。四百メートルはその倍だから二周。案外簡単そうじゃないか、と思っていたが走ってみると意外ときつい。ペース配分を間違えると、一気に最下位に落ちるという恐ろしい種目だ。

現在の自分の順位は三位。二位の緑色ゼッケンは二メートル程先に、トップの青色ゼッケンは六メートル程先にいる。赤色のゼッケンの奴は、最初のスタートでミスっていた。可哀想に。

「トップのバスケ部の日比野君、半周を回りました！ それを追いかける三人も頑張ってください」放送部の棒読みで喋る実況が聞こえる。もう少し熱の入った実況は出来ないのかよ、と内心で苦笑した。

そこで、あいつの名前が日比野ということを知った。あいつ、何故か知らないけどスタート前から僕のことを睨んでいた。特に、接点はないと思うし、何も悪い事をしたような覚えは無いのだ。

が。

トラックの一周目が終わった。二位の奴はスタミナが切れたのか、走る速度が遅くなっている。もう目と鼻の先だ。トップは四メートルほど先にいる。

速度を速めて一人を抜く。現在の順位は二位。一位まであと約三メートルちよつと言った所だろうか。まだまだ巻き返せる距離だ。トラックの四分の一を回った。そろそろ、追い上げなければ。僕はギアを九割に上げる。

「おっと、テニス部の近藤君、巻き上げに入りました！」そう言うことを言うんじゃないよ、と叫びたくなる。それを聞いたら相手の速度も速くなるじゃないかよ。

放送の所為かはわからないが、前の奴も速度を上げていく。まずい、このままじゃ一位に躍り出られない。あの棒読み実況め、と僕はテントの下で涼しい顔をしている放送部員に苛立つ。

——やはり、全速力で行くしかないか。

上手く行けば、ギリギリで抜かせる。だが、上手く行かなければスタミナが切れて三位に転落。だが、一位になるには、この策しかない。

二百メートルなら、確立は五分五分と言った所だろう。だが、これは四百メートル。その倍だ。それに、これはスタミナを如何にうまく使うかがで勝負が決まる種目だ。はつきり言って、失敗する確立は九割と考えても可笑しくはないだろう。

成功確立一割の大博打。僕は何としてでも、その一割を引き当てなければいけない。

ゴールまであと半周。僕は、ギアを最大限まで引き上げる。ぐんぐんと縮まる距離。だがそれに比例して荒くなっていく息。

——勝たなきゃ、勝たなきゃ。

「君のために四百メートル、一位取るから」
彼女に誓った言葉が脳裏をよぎる。

トラックは、もう残り四分の一となっていた。もう、僕のスタミ

ナは限界に達している。

もう少し、もう少し持ってくれよ。僕のスタミナ。

「ゴールまであと五十メートルを切りました！ 両者とも互角です！」

一位と並んだ。もうスピードは落とせない。

落としたら、そこで負けが確定だ。

絶対に、絶対に勝たないといけない。

あの子を、僕のものにするために。

「両者、ゴール手前。さあ、どっちが先でしょうか！」

——ずっと、この時を待っていた。

あの子を彼女にする為の、最初で最後のチャンス。

僕が、勝つんだ。

絶対に。

一気に、ゴールへと飛び込む。

ゴールを報せる銃声が、晴天に響いた。

さて、一位はどっちなんだ？

賭博、その行方。

「俺、青に三百円」カズが机にさつき勝ち取った百円玉を乱暴に三枚投げた。幸いそれらは机の下に落ちず、机の上で甲高い音を立てた。ばくと春次はるつくはその金額を聞き「うげっ」と言った。

「それはきついよ、カズ」さつき二着だった春次が、苦笑しながら財布を開ける。「じゃあ僕は安全に緑に二百円かなー」春次が机の右隅に五十円玉を四枚置いた。

四階の一年二組教室。ばく達三人はここで、ちよつとした『大人の遊び』をしていた。

まあ、簡単に言うとは賭けである。百円を一倍として、各々がゼツケンの色にお金を賭けていき、どの色が四百メートル走で一番にゴールするか決める。例えば、青に二百円・緑に百円・赤に二百円・黄に五十円賭けられていて赤が一位でゴールした場合、青に賭けた人は四百円、緑に賭けた人は二百円、黄に賭けた人は百円を赤に賭けた人に払う。もし、三人が賭けていない色が一位でゴールしたり、二人同時一位になったりしたら、賭けていたお金は戻される。当初は百メートルと言う話だったのだが、予想以上に入れ替えが激しかったので四百メートル走になった。

「サントは何処に賭けるんだ？」春次がさっきのレースでビリを当てたばくに声を掛ける。

「ああ、えーつとね」残っているのは赤と黄。さつきは赤に賭けたから、黄色にするか。

そこで悩んだ。何円くらい賭けようか。レースはこの賭けを含めてあと二回だ。今まで二百円や百円などのしょぼい金額で賭けてきた。

——そろそろ、思いつきり賭けてみるか。

どうせ外れても、この後三人で行くファミレス代やカラオケ代に消えるんだ。ばくは財布にある百円玉を全て机に出した。「じゃ、

黄色に四百円」

「うわっ！」春次の顔が青褪めている。まさかぼくがそんなに賭けると思っていなかったんだろう。ざまあみやがれた。

「賭けるねえ、サンタ」多分、カズも春次と同じ事を思っていたんだろう。結構驚いている。

「……やめても、いいんだぜ？」春次が耳打ちしてくる。

「やめねーよ」にやつとぼくは笑う。すると、春次がわざとらしく舌打ちをした。

「えーと、じゃあまとめますと」春次が紙に数字と名前を書いていく。「カズが青に三百円、僕が緑に二百円、サンタが黄に四百円。

もしも赤が一位でゴールした場合、賭け金は手元に戻る。みんな、オッケー？」

「おう」カズが力強く頷いた。

「うん、いいよ」ぼくは近くにあった机に腰掛けて外の様子を見る。

燦燦とグラウンドに陽の光が降り注いでいる。きっと太陽が真上に上がっていて暑いことだろう。それに比べてこの教室はどうだろうか。陽が入ってこないし、冷房は効いている。まさに砂漠の中のオアシスだ。

外の生徒はでかい声で騒いでいたり、水を飲んで休憩したりしている。ふと、グラウンドの端のほうでバトン渡しをしている集団を見つける。恐らく、リレーの練習だろう。一人、緑色の靴を履いて目立っている奴がいた。

「おつ、そろそろ始まるみたいだな」カズが窓際に立ってスタートラインを顎で示す。

左から順に、赤・緑・黄・青と並んでいる。見知った人がいるか少し気になったが、ここからでは顔の判別がつかないのでやめた。

四人の準備が出来て、スターターがピストルを空に向かって構えた。

どん。

音が鳴って、四人が走り出した。赤のゼッケンがスタートに失敗

して転んでいる。赤は体勢を立て直して走り出す。だが、最初に空いてしまった距離は痛い。赤に賭けなくて良かった、とぼくは安堵した。

「手元に戻る事はないみたいだな」春次がそう言う。ぼくと同じことを考えていたようだ。

「良かったよ。さっきぼく、赤と黄で悩んでたからさ」危うく痛い目を見るところだったよ、とぼくは春次に話しかける。

「赤を選べば良かったのに」春次が舌打ちをする。

「そんなことより、一周したぞ」

カズの声が聞こえ、ぼくと春次は外を見る。すると、黄と緑の距離が徐々に近づいていた。緑の走り方がもう崩れてきている。スタミナが切れてきたのだろう。

黄のゼッケンが速度を速めてそれを抜く。春次が「うわー、マジかよ」と苦笑いを浮かべた。

黄のゼッケンはそのまま青のゼッケンに近づいていく。だが、青のゼッケンがそれに気づいたらしく、彼もスピードを上げた。

「あと、トラック半周か」

「……だね」

心臓の鼓動が早まってくる。ぼくがスポーツを見てこんな気分になるのはいつ以来だろうか、と考えていると、視界の端で春次が両手を組んで何かを願っている。

「何を願ってるんだよ、春次」ぼくは彼に聞く。

「両方とも、同時にゴールしますようにって」

「案外、ありえそうだな。それ」カズがそう言い、春次がぱつと窓に寄る。ぼくも何事かと窓に寄った。

ゴール手前、青と黄のゼッケンが並んでいた。——いや、黄の方が若干前に出ているか？

テープが、切れる。

ピストルの轟音。

「よっしゃあ！」

三人の歓声が、クラスに響いた。
さて、結果はどうなった？

盗難、その行方。

「無い！」

部室に行つて啞然とする。俺の靴が無い。

「どうしたんだー？」鼻をつまんだ金沢が、外から覗き込んでくる。こいつ、俺は臭えのを我慢して探しているって言うのに。

「俺の靴が無いんだよ」

「マジ？ 盗難事件じゃん」ひょえー、と彼はムンクの叫びのように、両手を頬に当てた。こいつ、事態を軽々しく見てやがる。

「どうしよう。あれ、結構高かったんだけど」マジかよー、と嘆きながら近くにあった消臭剤を上下に振る。だがもう中身が無いらしく、何も音がしなかった。道理で臭いはずだ。今日、顧問に言つておかなければ。

「あれだよな、お前のつて。清水の色違い」青色が清水だよな、と金沢はあごを触った。

「うん。俺は緑色。確かサイズも一緒なんだよな、奇遇な事に」でもどうしよう、と俺はうずくまって頭を掻く。だがそこで、部屋の臭いを鼻で吸い込んでしまう。うわ、超臭え。俺は外に飛び出て、新鮮な空気を鼻から勢いよく吸う。はあ、体内が浄化される。

「まあ、探すしかないだろ」僕も手伝うからさ、と金沢が俺の肩を叩く。

「……ああ」

「そう言えばお前、何か種目出るの？」金沢が聞いてくる。

「いや、別に出ないんだけどさ」

「じゃあ、いいじゃねえか。探さなくなつて」つか、陸上部のお前が出ないってどういうことよ、と金沢が触れてはいけない所に突っ込む。

「それは、授業中寝てて気づいたら長距離しか無かつたから諦めたんだよ」苦笑しながらそう答える。俺は短距離専門だ。わざわざ出

来もしない長距離に出場して痴態を晒そうと思うほど、俺は馬鹿じゃない。

「じゃ、何で靴探してるんだよ」

「それは、何と言うかさ。アピールしたいじゃん？ 俺、陸上部員だぜ？ みたいな感じで」陸上部員が校内で活躍できるのは体育祭だけ、と言っても過言ではない。なので、出来る事ならばそこで注目を集めたい。そして出来る事ならば、可愛い女の子に告白とかされたい。俺はそう思って、部室にシューズを探しに来た。

「ホント、お前って能天気だよな」尊敬するよ、と金沢に軽蔑の視線で軽口を叩かれる。

「え？ 何か俺間違ってた？」

金沢は部室近くのみより目に付かない道に目をやって、俺のその問いを無視する。「冷てーなー」と大声で言うのと「静かに」と金沢が、人差し指を自分の唇に当てて、部室の奥へ指を指した。

「……君のために、四百メートル、一位取るからどこから、聞き覚えのある声が聞こえる。」

「先輩……」

「じゃあ、僕これから種目だから」こっちに走ってくる足音がする。金沢が真剣な表情で口をぱくぱくしている。隠れると言う事だろうか。

「どういうことだよ」と俺も口をパクパクさせる。

だが、遅かった。

「お、お前ら、何やってんの？」こんがりと日に焼けた友人の近藤が、焦った顔でこっちを見てくる。きっと誰もいないと思っていて驚いているんだろう。大丈夫だ、俺らもそう思ってた。

「い、いや、外に出たら会話が聞こえてきて……」あははは、と金沢が笑う。おい、お前目が笑ってねえよ。

「——あんま人に言うなよ。恥ずかしいからさ」そう言って、近藤が俺らに指を指す。

「じゃ、言わないから今度飲み物奢れよ」俺が咄嗟に取引を持ち

かける。

すると彼は苦笑して「わかったよ」と言った。してやられた、と思っ
ているんだろう。俺は金沢とハイタッチをする。

「じゃ、僕は種目だから」彼は手を上げて、走り去っていく。

「一位取れよー」俺は、近藤に向かってそう言う。言ってから、少し
お節介だっただろうかと思う。

だが「わかってるー」と返事が返ってきて俺は安堵した。どうや
ら、そんなことは無かったらしい。

「あいつ、一位取るかな？」金沢が俺に聞いてくる。

「あいつなら取るだろ。意地でもさ」というか、取って欲しい。俺
は心の中で近藤にエールを送る。

心地よい風が吹いた。さながらそれは、彼の走りを後押しするか
のようだった。

「じゃ、俺らは靴を探すか」金沢が、俺の肩を叩く。

「だな」自分のことなのに、すっかり忘れていた。俺は部室のドア
を閉める。

今日は暑い。だから俺の靴は、涼しいところで涼んでいる。そん
な気がした。

さて、どこから探そうか？

読書、その行方。

胸ポケットが震えている事に気がついた。いいところなんだけだな、と思いつながら本を閉じる。俺はポケットから携帯を取り出し、時間を確認する。――十時五十分。そろそろだろうか。

席から立ち上がり、本を机の一番上の引き出しに入れた。本の題名は「Color girl」というものだ。叶野三郎という作家が書いている。

俺がこの作家を読むようになったのは、彼女のおかげだ。実は、先週風邪をこじらせて寝たきりになっていて、その時に「暇にならないように」と彼女が気を利かせてくれたのが本だった。

元々彼女は本が好きで、よく読んでいる。俺はあまり本を読むことは無いのだが、これも彼女の事を良く知る機会だと思い、彼女に本を貸してもらった。

貸してもらった数冊の中で一番気に入ったのが、この『叶野三郎』という作家だった。最初に読んだ『そして残ったものは』という本が面白くて、一気に読書にはまってしまった。

俺は立ち上がって校舎内の巡回を始める。生徒と教員は本来外にいたってはいけないのだが、俺は先週風邪を引いた為、生徒が校舎内でサボっていないかを確認する係となった。まあ、暑い外に出なくていいし、本も読めるので楽な仕事である。

職員室を出て、二階から巡回を始める為、階段を上る。一階を巡回しないのは職員室や保健室などの学級教室以外の教室があるからだ。

自分の足音が、静かな校舎内に響いていく。別に悪い事は何もしていないんだが、俺はなるべく足音を立てないように歩いてしまう。何をやっているんだ俺は、と不思議に思う。泥棒じゃあるまいし。

まあ、これだけ静かなんだ。これなら、騒いでいる生徒がいたらすぐに見つけられるだろう。

二階に着く。グラウンドにいる教師から丸見えだから、恐らくここにはいないだろうが、一応確認をしておこう。そうしようとした時だった。

がらがらと、引き戸を引く音が聞こえた。音は上階から聞こえる。どうやら、誰かがいるらしい。俺は三階へ足早に向かう。

「ねーんだけど」

「いや、俺に言われても。お前が涼しい所にあるって言うから来たんじゃん」

「あ、そうだった」

そんなやり取りが聞こえる。何と注意深くない連中だ、と彼らのその無用心さに驚く。まあ、その方が見つけやすくて楽なのだが。

三階に着く。教室にあるロッカーを開けたり、バッグのファスナーを開けている音が廊下に丸聞こえた。

「なあ」

「何だよ」

「俺のシューズ何処にもないんだけど」

シューズ。その言葉を聞き、彼らが陸上部員だということに気づく。普通の生徒はシューズとは言わず靴と言う。それに、生徒は学校指定の体育靴を履かなければ体育祭に出られない。きっとそろそろ自分の種目で、部室に行つてシューズを取ろうと思つたら無い事に気がついたのだろう。何とも気の毒に。

きつと、陸上部員なら種目に出たいだろう。だから俺も手伝つてやるか、暇だし。俺はそう思い、彼らのいる教室に向かおうとする。

「よっしゃあ！」

複数の歓声が、上階から聞こえた。明らかに異質な歓喜の声。俺は早足で向かうことにした。

何でそんなに喜んでいいのかを考える。

女子のリコーダーを見つけた。——いや、違う。俺は昔やったけど。

難しい問題が解けた。——そんな理由で体育祭をサボっている奴

はずいない。

難しいゲームがクリアできた。——うん、これが一番ありえそう
だ。

そんなことを考えているうちに、四階にたどり着いた。

「いやあ、まさか当たるとはばくも思わなかったよ」

「ちつ。僕は二人同時一位だと思って喜んだのに」

声は、少し奥から聞こえる。恐らく二組とか三組辺りだろう。俺
はそこへ向かう。

中には笑顔の三人の男子。素早く、扉を開ける。

「お前ら、何やってんだ」少し大きい声を出して威嚇をする。三人
は「やばい」という顔をしている。

どうやら、不良生徒ではないらしい。不良生徒は、教師に見つか
るとすぐにつつかかってくる。俺は少し安堵した。

「いや、ちょっとサボってました」えへへ、と一人がへらへらと笑
った。

近くの机に、百円玉や五十円玉が大量に乗っている。——当たり、
ってそういうことか。

「何やってたんだ？」一応、俺は聞く。

「いや、ちょっと俺らで大人の遊びを」大人の遊びねえ、と俺は心
の中で溜息をつく。何をませてんだ、こいつらは。

「はい。取り分をさっさと整理して外行け。次見つけたら、体育の
先生に言いつけるからな」俺はそう言って教室を出た。後ろから生
徒達の「はい」という声が聞こえた。

普通なら怒る所なんだろうが、昔俺もこういうことをやっていた
ので強く言えない。まあ、一回くらい見逃そう。俺もあの時そうさ
れたし。俺は一年二組の引き戸を閉めた。

さあ、帰って本の続きを読むか。続きが気になり、歩みが速まる。
さて、これからの展開はどうなるんだ？

体育祭、その終幕。

「さあ、今回も幾つものドラマを生み出した体育祭。最後に、感動の逆転劇を生み出した、クラス対抗リレーの一位の三年三組のアンカー、清水君にインタビューをしたいと思います」放送部員が、声高らかにそう言った。それに呼応するかのように生徒たちが拍手やら歓声を上げる。

隣の列から、一人の生徒が出て行く。恐らく、それが噂の清水先輩だろう。私が後ろの方にいるので、彼の姿はよく見えない。かろうじて足元は見える。恐らく陸上で履いていると思われる、緑色のシューズがやけに目立っていた。

清水先輩はマイクを向けられ、戸惑っているのか、ぼそぼそ話し始めた。

「いや、僕がインタビューなんか、受けていいんですかね？」清水先輩は緊張しているのか、壇上に上がっていきなりそんなことを言った。「頑張れー」という女子の声が右隣の列から聞こえる。まあ、あの逆転劇を見ればその歓声も納得だ。

リレーで清水先輩の前の日比野先輩が、トップだったのに途中で転んでしまい三組はビリになってしまった。だが、清水先輩のそこからの巻き返しがすごかった。まるで他の先輩方が手加減をしているんじゃないか、と思えるくらいにその清水先輩の走りはものすごかった。そして二位の組と僅差で清水先輩が一位を勝ち取った。それを見ていた私は、思わず「すごい！」と叫んでしまった。

「ねえ、紗枝」私の横にいる本田ちゃんがにやにやしている。どうかしたのだろうか。「そう言えば、近藤先輩はどうだったの？」

ああ、そうか。彼女は気分が悪くなつてずっと保健室にいたのか。私はそのことに気づく。

そのことを話すのは、ちょっと恥ずかしい。私は彼女に耳打ちをする。「一位、取ったよ」

バスケット部の日比野先輩と最後に互角の勝負をしたが、彼はギリギリ勝った。それを見たとき、私はちよつと嬉しくて涙が出た。今考えると、日比野先輩は可哀想だなと思う。リレーでは転ぶし、四百メートルでは近藤先輩に負けるし。

「で、どうなのよ」ひじで、私をつついてくる。どうなの、とは告白の返事ということだろう。そのことを考えて、私の頬が熱くなる。「……そりゃ、オッケーに決まってるでしょうが」唇を尖らせながら、私はそう言う。あんなに格好いい先輩に、あんな告白のされ方をされたら、普通は惚れる。

「おー、お熱いですねー」本田ちゃんはからかうように、わざと棒読みで言う。

「からかわないでよ、本田ちゃん」私がそう言うと、あはは、と本田ちゃんが笑い出した。馬鹿にされている感じで、何かヤダ。

「あ、そう言えば保健室で聞いたんだけどさ」彼女が声を潜める。

「どうしたのよ」彼女に釣られ、私の声も自然と小さくなる。

「何かね、運動音痴だからって理由で男子がサボって教室でカケゴトしてたらしいよ」

「カケゴト？」私の脳にそろばんが思い浮かんだ。何か計算でもしていたんだろうか。

「あれだよ。競馬とか、競艇とか、あんな感じ。誰が一位でゴールするか、ってお金賭けてたらしいよ」ああ、賭け事ね。私は脳からそろばんを追い出す。にしても、何と悪い連中だろうか。まったく、体育祭をサボって涼しい教室で日焼けもせず遊んでいるなんて、なんと羨ましいことか。私も出来る事なら教室にいたかったのに、と頬を膨らませる。

「最後に何か一言、お願いします」

気づけば、清水先輩のインタビューがそろそろ終わろうとしていた。あ、全然聞いていなかった。

「えー、本人は気づいていないと思いますが」そう前置きして清水先輩は始めた。「色違いの靴を持つ彼に感謝です。本当にありがと

う。そして、ごめん」

そう言って清水先輩は苦笑しながら一礼し、壇上を降りた。

「あ」隣の人が声を漏らした。「あれ、俺の靴だ」

さて、何が起きた？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5773s/>

体育祭、その行方。

2011年4月24日18時40分発行